

## 連携協力実習校での豊かな学びをフォーラムで発表！

平成28年2月13日(土)に、平成27年度宇大教育実践フォーラムが、宇都宮大学教育学部教室等で開催されました。参加人数は総勢141名で、小中学校教員、県立学校教員、教育委員会関係者及び他大学教員、そして学生・大学院生等々、多方面の方々が参加してくださいました。宇都宮大学教職大学院生は、午前には学校現場での長期実習科目である「教育実践プロジェクト・長期インターンシップ」の取組についてのプレゼンテーションを連携協力実習校ごとに行いました。また、午後には「教育実践について語りあうラウンドテーブル」で、長期実習における発見や気づき・考えたことや思ったこと等を、他の発表者の先生方と同じように自由に語りました。フォーラム参加への準備段階で教職大学院生は、「省察しながら、文字にすること・言葉にすること・発表すること」で、自身の取組の意味や実践の意義がより鮮明に浮かび上がってくる経験をしました。今回は、フォーラムでの教職大学院生の学びについて話題にします。

### ◆活性化フォーラムから実践フォーラムへ

昨年度までは「大学との連携による学校活性化フォーラム～校内授業研究を元気にする～」という名称で、教育学部地域連携専門委員会(スクールサポートセンター)が主催となり、フォーラムを行っていました。そして今年度、名称を「宇大教育実践フォーラム」と変更し、宇都宮大学大学院教育学研究科主催(事務局:教職センター)で、新たに開催することとなりました。

宇都宮大学が長い時間をかけて、教育委員会や学校と連携して行ってきた校内授業研究活性化の趣旨は継続しつつ、教育委員会の支援を基盤にした教職大学院と学校との連携協力についても発表することになったのです。

この事業の更なる特徴は、教職大学院の先進的な取組をしている福井大学を中心に複数の大学で組織する「教師教育改革コラボレーション」との共催で行っているという点にあります。宇都宮大学は、この組織に教育実践系のメンバー大学として参画しています。他大学の先生方も数多く参加してくださいることにより、より異質性の高い集団で実践の報告をじっくり議論するための素地が確保されていると言えます。



### ◆教育実践プロジェクト発表会

午前は、教職大学院の「教育実践プロジェクト・長期インターンシップ」(長期実習)の発表を連携協力実習校ごとに行いました。学校現場でしか学べないこと、教職大学院生の立場だからこそ見えてきたこと等

が、院生全員のプレゼンテーションによって明瞭になってきました。講評の益川弘如准教授(静岡大学大学院教育学領域)からは、1年目の成果と2年目への課題とを提示していただきました。また、静岡大学の事例を手がかりにして、教職大学院の長期実習における成果をどのようにして学校に、そして地域に根付かせていくかとのお話がありました。

明確な論拠をもって実証的に実践の意味づけをしながら、宇都宮大学教職大学院の長期実習の成果を地域全体に広げていけるような仕組みづくりをしていかなければならないことを今後の課題としてとらえることができました。



### ◆教育実践について語り合うラウンドテーブル

午後は6人程度のグループに分かれて机を囲み、授業改善や学校改革などの教育実践を率直に語り合い、意見交換するラウンドテーブルを行いました。教職大学院生もそれぞれのグループに入り、日常的な取組について語りました。他の先生方の取組に触発されたり、現在の取組状況について励まされたり、今後のことについてヒントをいただいたりと貴重な時間になりました。様々な立場の方々と交流できたことで、多角的な意見に触れることもできました。立場を超えて、じっくり語り、傾聴し合うことで教育実践の本質に迫る瞬間が幾度となくありました。こういったコミュニティを広げていくことこそが、教師としての力量形成に直につながるということを改めて実感したところです。

近年「エビデンスに基づいた教育」といった表現が、教育に関する報告書などに散見されるようになりました。「エビデンス (evidence)」は「科学的根拠」などと訳すことができ、思い込みや思いつきではなく科学的に得られたデータや指標を根拠に教育を行おうという考え方のようです。従来からある考えのようには見えますが、改めて「エビデンス」という言葉に着目して、その意味や意義を考えてみましょう。「エビデンス」は信頼性の度合いを重視します。例えば、新しい薬を開発する際、ある集団を無作為に2つに分け、ひとつのグループにはその薬を、他のグループには偽薬を投与し、その結果を統計的に集計します。この実験を異なる集団で複数回重ねることで、その薬の効用について「エビデンス」が得られます。このような手続きを経たものは実証性や因果関係の点から最も信頼性が高いとされます。逆に最も信頼性が低いのは、「現場のデータに基づかない専門家の意見」です。(エビデンス階層については、Oxford Center for Evidence-based Medicine, 2009 等を参照。)

以上のことから、ある「エビデンス」が教育の場で強調される際には、その信頼性はどうかと考える必要がありそうです。そもそも教育実践は、薬と異なり、同じ方法や教材を用いても子どもの学びは様々で同じ成果は得られません。実証性や因果関係の特定は困難です。それにもかかわらず、なぜ、ある「エビデンス」が強調されるのか、その背景を読み解く力量を教師は持ちあわせるべきです。

あわせて、自分の教育実践の根拠としている「エビデンス」はどうかのらうと立ち止まってみることも必要かもしれません。どのような根拠で子どもを理解したり、授業中の進行を進めたりしているのかを考えるだけでも、新たな気づきが得られるのではないのでしょうか。

《シリーズ:教職大学院授業紹介⑤ 「栃木の学校改革」(選択科目[後期・集中講義])》

この講義は、栃木県の学校が置かれた現状を様々な角度から把握して、新たな学校改革の方向性を模索し、自分なりの展望を持てるようにすることを目的としています。今回は、栃木県において教育の各分野をリードするゲスト講師を招聘することで、幅広い知見と見識を身につけることができました。

一日目午前中は、栃木県教育委員会事務局総務課教育政策担当者の横須賀好市課長補佐から「次期教育振興基本施策」について、午後は、栃木市教育委員会教育総務課教育政策チームリーダーの吉田康男主幹から「栃木市の教育施策」について、教育行政の立場から講義がありました。

二日目午前中は、栃木県総合教育センターの和氣由美子教育相談部長から「栃木県の教育相談および特別支援教育の現状と課題」について、午後は、原田浩司准教授から「データで見る栃木県の特別支援教育」「学校改革を特別支援教育の視点から捉え直す」について、子どもたちが抱える諸問題について講義がありました。



三日目午前中は、近藤秀人准教授から「栃木の学校改革から戦略的視点の重要性を知る～少人数学級の実現・学力向上策・地域との連携に焦点化して～」についてと、石嶋和夫特任准教授から「栃木の学校間接続『幼・保・小・中・高』の連携」について講義がありました。いずれも講義をおとして栃木の教育の最前線の情報を共有化した後に、講師と院生間で熱心なディスカッションが行われました。また、最終日の午後には、院生各自が三日間の講義の中から一番関心のある課題を1つ選び、解決の手立てや方法と今後の方向性についてまとめた後に、プレゼンテーションし合う時間が設けられました。

院生が発表した研究テーマのいくつかを紹介します。「学校を核とした新たなコミュニティづくり」「個に応じた支援を活かす学校づくり」「小中一貫教育の取り組みについて」「学校と地域の連携を効果的に進めるために」

また参加した院生からは、次のような感想がありました。「栃木県のビジョンや市の教育施策を意識しながら各学校の特色ある教育を実践することの重要性を痛感した」「子どもにとっても保護者にとっても『この学校で学びたい』『この学校で子どもを学ばせたい』という魅力的な学校づくりを目指していきたい」

(原田 浩司)

